



一杯の牛丼ができるまでに

会員 長野 宰士 (72期)

2011年3月11日、私はまだ弁護士ではなく、某有名牛丼チェーン店での時給980円のアルバイトで生計を立てるフリーターでした。

その日、私は、友人と共にJR山手線で秋葉原に向かっていたところ、経験したことのない強い揺れに襲われ、有楽町駅で下車せざるを得なくなりました。駅前のビルが、一目でわかるほど揺れていたのを憶えています。しかし、私と友人は、いまだ事態の深刻さに気付かず、徒歩で秋葉原へ向かい、そこで帰宅難民になりました。

ようやく帰宅したのは午前0時過ぎ。そのまま寝ようかとも思いましたが、念のためにバイト先に連絡したところ、今すぐ来てくれと言われました。そして、そのままワンオペ夜勤に入った私は、その夜、店の売上記録を大幅に更新しました。それもそのはず、地震の影響で、周囲の飲食店が軒並み休業し、食事を提供できるのが我が店しかなかったのです。数年後、店は閉店したと聞きましたが、あの夜、私が樹立した記録は、ついに更新されることはなかっただろうと、勝手に思っています。

その日を境に、物流の停滞で食材が十分に入らない日が続きましたが、我が牛丼屋は、メニューを制限しつつも営業し、とにかくにも牛丼を提供し続けました。私も私で、地域の外食を一手に担っている（とでも自負しなければやっていられない）ような忙しい日々を過ごすことになったのですが、そんな中で、感じたことが二つありました。

一つ目は、仕事があることのありがたさです。当時、テレビは地震の報道ばかりで、家にいても気が滅入る

ばかりでしたが、店が営業を続けてくれたおかげで、私には仕事があり、人と接することができました。「もし今、シフトがなければ、私は精神的にどうなってしまうだろうか」と想像すると、仕事があることのありがたさがしみじみと感じられたのです。

二つ目は、真っ当な仕事は、どんなものであっても、世の中の役に立つということです。あの頃、夜になると、店前の目黒通りを通る自家用車はほとんどなく、ほぼ全てが運送トラックでした。そして、それまでは大して気に留めることのなかったトラック達を窓の外に眺めたとき、私は気づかされました。このトラック達が荷物を運んでくれないと、我々は牛丼ひとつ作ることができないのだ、と。

一杯の牛丼がお客様に届くまでに、どれだけ多くの人々の仕事に関わっているだろうか。そして、その最後の工程を自分が担当していると思うとき、勝手気ままなフリーターに過ぎない自分が、小なりといえども世の中に役立っていると思うことができ、なんとなく誇らしく感じられたのです。

現在、私は、職業を弁護士に変えて5年が経過しました。ボスや先輩に迷惑をかけてばかりで、弁護士の仕事について語る資格などないのですが、牛丼屋で食事をとるときに、ふとすることがあります。それは、今も自然災害が頻発する中、物流滞る被災地で、食事を提供している人達がいるということです。そして、もし、私の弁護士としての仕事が、間接的にでも、その人達の役に立っていただけたらいいなと、勝手に思っています。もしそうであれば、私の今の仕事も、世の中の役に立っていると思えますから。